

公開シンポジウム・上映会

オペレッタと 映画の文化史

交響する大衆娯楽と多文化社会

『イスタンブルの薔薇』 *Die Rose von Stambul* (1919年)

上映会

2026年 **12月5日(土)**
13:00~18:00

早稲田大学小野記念講堂
(27号館地下2階)

13:00- 開会挨拶 石井道子 司会 大田美佐子

第一部

異文化表象とオペレッタ

登壇者 伊東信宏・大西由紀

第二部

独逸圏の娯楽文化と社会

登壇者 小川佐和子・高橋義彦

15:30- 第三部 上映会
『イスタンブルの薔薇』



主演フリッツィ・マッサーリ

○アクセス○

- *JR山手線/西武新宿線
高田馬場駅 徒歩20分
- *東京メトロ東西線
早稲田駅 徒歩5分
- *都バス
高田馬場-早大正門 5~10分
- *都電荒川線
早稲田駅 徒歩5分



入場無料
自由席

事前
申込制

申込フォーム▶

<https://forms.gle/BdFkqyHikCBLfrJ2A>

12月4日(金) 締切



【主催】 JSPS科研費22KK0187, 23K12045, 早稲田大学総合研究機構オペラ/音楽劇研究所

【協力】 John Sweeney/Mariann Lewinsky Sträuli/Filmarchiv Austria

【後援】 早稲田大学総合研究機構

【お問合せ】 sawako.ogawa@let.hokudai.ac.jp (小川佐和子)

科研費
KAKENHI

FILM
ARCHIV
AUSTRIA

「私の旧き祖国、オーストリア＝ハンガリー君主国は、オペレッタの上演から世界戦争の恐ろしい劇場へと直行していったのです」——作家ヨーゼフ・ロートは1932年にこのような言葉を残し、その後亡命先のパリにて客死した。二重帝国時代の多民族表象、第一次世界大戦に疲弊した市民の現実逃避としてのエキゾティシズム、1938年のナチ・ドイツによるオーストリア併合と第二次世界大戦を経た戦後ウィーンの実録物。本シンポジウムは、19世紀末から第二次世界大戦後の中東欧・独・日本のオペレッタと映画の諸相を、映画史、音楽学、政治思想史、比較文学の観点から読み解いてゆく。ロートの言葉を導きの糸として、現実の戦争や社会と虚構とが、いつの間にか地続きとなっていたというアクチュアリティのある問題に光を投げかける。

PROGRAM

13:00-

◎開会の挨拶 石井道子（早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所 所長）

司会 大田美佐子

◎第一部 異文化表象とオペレッタ

「ウィーン・ブダペスト・オペレッタの系譜

——『ジプシー男爵』『チャールダーシュの女王』そして『ジプシーの恋』」伊東信宏

「『微笑みの国』はどこにある——戦時下日本におけるオペレッタの「東洋」」大西由紀

◎第二部 独逸圏の娯楽文化と社会

「『イスタンブルの薔薇』は咲く——第一次世界大戦下の独逸圏における舞台と映画」小川佐和子

「実録『第三の男』——戦後ウィーンの光と影」高橋義彦

15:30-

◎第三部 上映会『イスタンブルの薔薇』*Die Rose von Stambul*

（1919年、ドイツ映画、フリッツィ・マッサーリ主演、アルトゥール・ヴェリン監督、73分）

前説「ウィーンの下町娘からベルリンのオペレッタ・ディーヴァへ

——フリッツィ・マッサーリ主演映画の発掘」小川佐和子

※日本語字幕が付きます／伴奏は事前録音したものを使用します（ジョン・スウィーニー氏提供）

◎全体ディスカッションと質疑応答

◎閉会の挨拶

※途中休憩あり

【『イスタンブルの薔薇』のみどころ】

舞台は第一次世界大戦直前のイスタンブル。ヒロインのコンジャは父の言いつけでアフメトと結婚するが、自分の心はフランスの進歩的な作家アンドレにあると夫に打ち明ける。じつはこのアンドレはアフメトの裏の顔なのだが、コンジャはその正体を露知らず。はからずもコンジャは自分の夫と浮気をするという、オペレッタに定番の喜劇的な行き違いを重ねながら、二人はエロティックな恋の冒険を繰り広げる。

映画の原作オペレッタは、第一次大戦開戦二年目の1916年にウィーンで上演され、翌年ベルリンで大ヒットした。当時この舞台は同盟国のオスマン帝国に対する独逸の共感を誘引し、翻案の過程で同盟国側の帝国主義的な思惑が露呈することとなった。さらに本作のエキゾティシズムは、ヨーロッパの文化的優位性を示すことと、同盟国を侮辱してはいけないという検閲規則との間でゆらいだ。さて、「モダンな薔薇」のヒロインを演じたウィーン生まれのフリッツィ・マッサーリ（1882-1969）は、1920年代ベルリンの舞台で人気絶頂を迎えた歌手である。舞台上の存在感、劇的でアイロニカルな表現力、そして大胆な官能性によって、彼女は観客と批評家を魅了した。マッサーリ演じるコンジャが、ハレムのなかでヴェールに覆われた操り人形から、西欧的な解放されたモダンガールへと変貌してゆくさまは見どころのひとつだ。

マッサーリ主演の唯一現存する映画『イスタンブルの薔薇』は2025年に復元され、チネマ・リトロバート映画祭（ボローニャ復元映画祭）でお披露目上映された。今回は日本での初上映となる。

【登壇者プロフィール】

大田美佐子

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授。早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所招聘研究員。専門は音楽文化史。クルト・ヴァイルを中心に、音楽と言葉を結ぶ多様なジャンルのグローバルな展開や、亡命や冷戦が文化芸術の進展に現在まで与えている影響に関心がある。コロナ以降、身体の衰えに不安を感じ、楽器の演奏に、心身のチューニングとして、希望を見出している。

伊東信宏

大阪大学中之島芸術センター特任教授。バルトークの作品研究から東欧の民俗音楽研究、さらに東欧の大衆音楽研究にも脱線し、いまは「負ける音楽」を提唱中（特に賛同者はいない）。ブダペスト・オペレッタ劇場のセカンド・ヴァイオリン奏者として、ワルツの2拍目と3拍目だけ弾いて暮らすのが夢です。

大西由紀

大東文化大学文学部講師。早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所招聘研究員。専門は比較文学。翻訳定型詩研究から出発し、資料と人との出会いに導かれて、いつの間にか翻訳歌劇史研究の人。このテーマを扱うようになって気付いた自分の強みは、定番の演目を何度見ても初見のように驚ける素直さと、ノイズまみれのSP盤復刻音源を丸一日聞き続けても壊れない粗雑な耳です。

小川佐和子

北海道大学文学研究院准教授。早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所招聘研究員。専門は比較映画史。究極的には一つのショットから歴史観を示すことをめざしている。最近は百年前のプログラムを片手にウィーンの映画館と劇場の跡地を歩きながら、どうやって小屋をハシゴするかという妄想にはまっています。

高橋義彦

北海学園大学法学部教授。専門は20世紀オーストリアの政治文化史。大学での担当科目が「政治思想史」のため、普段はプラトンやホッブズの話ばかりしているので、今回はウィーンについて、それも『第三の男』についてお話しできるということで、とてもワクワクしております。